

鳥のはね

作 ラビンドラナート・タゴール

訳 内山真理子

外あそびをしていた娘が

あそびをほうってかけてきた

「ほら、みて、みて

すてきなものをみつけたの」

うれしそうに目をかがやかせ

くちもとに笑みがはじけて

結い髪が

ほどけていたのを気にもせず。

手くびにはめた

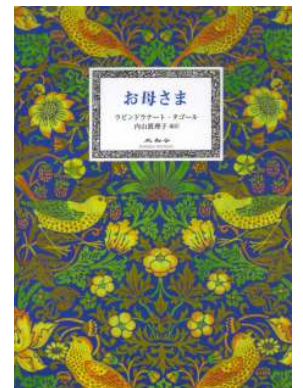
いくつもの赤い細い腕輪（うでわ）

娘がそのちいさな手をたたくと

腕輪がりんりんと鳴る。

母の首に両手をまわし

そのひざにのって



この詩がのっている本
ラビンドラナート・タゴール 著
内山真理子 編訳
『お母さま』（未知谷刊） P27

一 腕輪

うでわ。インドでチュリとよびます。女の人はいくつもの腕輪をするのがしゅうかんです。

息せききつていう「ほら、みて

いいものみつけたの、よくみてね」

金色きんいろをした鳥とりのはね

金色きんいろの水みずであらいたてのよう

みずみずしい光ひかりが

三あかつき 暁あけのはねとなつて落ちてきたかのよう。

はねでそつとまぶたをさすると

やさしい眠りねむにさそわれる

そこにはきつと雲くもの物語ものがたりや

四こんぺき 紺碧こんぺきの空そらの話はなしがまじっている。

ちいさな巣す、ひな鳥どりたちの群れむ、

鳥とりたちのさえずりやおしゃべり

朝あさのしあわせ、飛ぶことへのあこがれ――

それらすべてが心こころにうかぶ。

はねで額ひたいをなで

まぶたをなでながら

娘むすめはうれしくてたまらぬようにいう

「ほら、みて、みて

二 みずみずしい しんせんで、わかかわかしいこと

三 暁 よあけ

四 紺碧 ふかく、こい青色のこと

五 額 おでこ

すてきなものをみつけたの」

母はははそれをみてわらいだした

「まあ、つまらないものを」

こともなげに地面じめんにほうつて

さつきと行いってしまった。

娘むすめはなにもしらず

地面じめんにすわりこんでしまった。

まるで空そらから地上ちじょうにぬけおちた

鳥とりのはねそっくりに。

もはや外そとあそびにもどることもなく

くちもとから笑えみはきえて

やがてついに目めから

なみだがこぼれた。

鳥とりのはねをかくして

秘密ひみつの宝物たからものにしてしまった

ひとりであそび、ひとりでしまった

もうだれにもみせようとはしなかった。

詩集『おさなご』所収

六 こともなげに なんでもないかのように。問題にもしない。